

「民の山」金峯山と千歳山

日本山岳会 山形支部 木村 喜代志

就職を機に56年間住んだ庄内、鶴岡から山形に引っ越して2年が過ぎた。鶴岡では自宅の庭から朝な夕なに眺めていたのが金峯山であった。山形で入居している高齢者向けコンドミニアムでの窓越しに千歳山を見て一日が始まる。双方の山は500mにも満たないが、気が向けばふらり出かける低山逍遙の舞台であり、地元民にとっては生活に溶け込んでいる民の山である。

<金峯山>

朝日連峰北西端から北に伸びてくる尾根がある。摩耶山、湯ノ沢岳、母狩山、鎧ヶ峰と続き金峯山(キボウザン)で庄内平野に吸い込まれる。これらの山々は、かつて修験道の舞台であり、中国廬山への憧れからか五老峰の呼称も残っている。

城下町鶴岡の街づくりの際には、金峯山と母狩山は鳥海山と共に「山当て」、遠望できるように町割りがされていたという。金峯山は小学校の遠足に組み込まれ、料亭の盃には「金峯在杯」と記されるなど、鶴岡の人々にとっては時を越え、暮らしと重なる日常生活に溶け込んだ山である。人々は親しみを込めて「きんぼやま」と呼ぶ。

金峯山は、671(天智10)年、修験道の開祖と仰がれる役小角(えんのおすぬ)によって開山、金剛蔵王権現を祀ったといわれている。古くは山頂を「仏」、麓の丘陵を「蓮華」に見立てて蓮華峰、あるいはハスの八枚の花弁を放射状に並べたものを「八葉」ということから「八葉山」とも呼ばれていた。承暦年間(1077~1080)、丹波守盛宗が出羽国に移るとき、奈良吉野の金峯山(きんぷせん)を勧請してから金峯山(きんぼうさん)と改めた。江戸時代には庄内藩の祈願所として栄え、神仏習合時代には母狩山から摩耶山まで真言宗の修験道場となった。そして、明治の神仏分離にあたり1870(明3)年に御嶽(みたけ)神社、1877(明10)年には金峯神社に改称した。

車道終点の中の宮社務所から登り始めると、地面が金粉をまいたようにキラキラと輝いているのが目に留まる。砂金と間違われやすい金雲母(きんうんも)で、この付近の花崗岩に含まれていたものが剥がれたものである。金峯山の地質は硬い花崗岩で「金峯石」と呼ばれ、庄内藩鶴ヶ岡城の石垣、近郷集落の墓石に用いられたと聞く。参拝路は修験の山ということもあり、標高に似合わず急坂、露岩が続く。老杉の根で持ち上げられたのが不規則に傾き、苔生す石畳が現れると山頂で、入母屋造りの重層建築の金峯神社本殿、蔵王権現堂が見えてくる。471mの山頂の北側を回り込むと丸太のベンチが設置された一望台で、三等三角点(459m)がある。その先に庄内平野、鶴岡の市街地が飛び込んでくる。西に高館山、北に長い裾野を伸ばした鳥海山、北東に丁岳、立谷沢の奥に下柳沢山、そして虚空蔵岳から続く月山、湯殿山まで望まれる。

出羽三山や鳥海山と共に神仏が住む霊山として崇められて来た。山麓の青龍寺から山頂までの参拝路には江戸時代に崇敬者から寄進されたスギが鬱蒼と茂り、その木蔭に林立する墓石、石碑が、時を越え厚い信仰を物語っている。また、死者の魂は金峯山にしばらく留まった後に背後の深山、月山または摩耶山に昇っていくという言い伝えが残っている。

登り口は東に青龍寺口、中の宮で青龍寺口と合流滝沢口、北の金峰少年自然の家口、西に「女人禁

制」の石碑が残る湯田川（藤沢）口などがある。青龍寺コースと並走して中の宮の社務所前まで車道が通っていることもあり、季節を問わず登山者、参拝者に会わないことはないほど、地元の老若男女が慣れ親しんでいる「民の山」である。

余談になるが、金峯山が白くなるのを見て本格的な冬の到来を知り、金峯嵐が山麓の積雪を左右する勢いがあり、市街地とは比較にならない降雪に見舞われる山である。標高の関係から湿り雪だが、寒波襲来、強風時となれば話は別である。青龍寺から中の宮までの参道は尾根筋の蔭になり風は弱く、老杉茂る中の雪は粉雪と化す。そして、中の宮社務所手前の隋神門から車道を挟んで反対側に、山頂まで続く小型トラクター用の作業道路入口が見える。ここは登りが容易なうえ、途中から参道の痩せ尾根の東側に入るため風は極端に弱まる。作業用道路を進むと間もなくスギに代わって真直ぐに伸びた灰白色のブナの静林に代る。ブナという言葉から意識する標高を大きく下回っているが、山麓の人々から警戒されている「金峯嵐」の寒風によって運ばれてくる降雪によるものだろうか。山頂が近づくと山頂から東面に三角形の雪の斜面が広がる。そして、母狩山へと続く尾根には、小さいながらもいつも雪庇が形成されている。

降りるスキーは本殿の脇を頂点として広がる三角形の斜面を、登ってきたトレースに向かって一気に滑り込む。後はトレースに沿って滑るだけである。登り口の随神門(中の宮社務所)まで10分とかからない。随神門から青竜寺までの参道雪面は一段と広がる。直ぐに小さな登り返しがあるが、ここを除けば滑りが止まることはない。金峯山は荒天時限定ではあるが静かな貸し切りのスキーフィールドでもある。

<千歳山>

山形盆地の東西に、背後の大きな山々の前に丸みを帯びた円錐形の山がいくつも見える。特に、朝霧に霞み、もこもこと重なり合う風景は童謡にでも歌われるような微笑ましくなる光景である。庄内のゆったりとした波打つ山並みとは明らかに違う風景である。山名を確かめてみると、東側には千歳山をはじめ大森山、大岡山、戸神山など、西側には富神山、文珠山、少し離れて経塚山などを辿ることが出来る。なかでも千歳山は、大きさもさることながら市のシンボルに相応しい端正な円錐形をして鎮座している。

千歳山をはじめこれら対称的な傾斜面を持つ美しい山容は火山に起因している。とは言っても、噴火で流れ出たマグマによって形成された山ではない。山形県の殆どがまだ海底に沈んでいた1,200万年前頃、海底火山が盛んであった。海底の堆積していた地層の中に、粘性強いマグマが上昇してきてドーム状に固まった。その後、日本列島が山地、盆地、平野などに区別される数十万年から数万年前にかけて地表まで隆起した。その後、ドーム状の岩塊を覆っていた堆積物、さらには周りの柔らかい地層、泥岩や凝灰岩が徐々に浸食され、山裾に堆積して円錐形の山になったと考えられている。結果として、安山岩や流紋岩など硬い岩山が浸食から取り残されて孤立した姿になった残丘（モナドノック）と言われている。萬松寺口からの登りで階段状の急な登りを過ぎ、山頂に近づくと岩稜が現れ、この上にコースが伸びている。これは岩塊を覆っていたものが浸食されて現れたドーム状の岩塊本体である。また、安山岩や流紋岩からなる山地は侵食、風化が遅く土壌ができ難く、乾燥気味になる。このような環境に育つのが松だという。千歳山全山をアカ松が覆っていたことも納得できる。

千歳山の名称は 1,300 年前、中納言藤原豊充の娘、阿古耶姫を愛した名取左衛門太郎との悲恋物語に由来する言い伝えが残っている。名取左衛門太郎はこの山の老松の精であったが、切り倒されてしまう。その跡に若松を植え「千歳千歳折る勿れ 切る勿れ 我が夫の宿る木なり」と詠われたことが「千歳山」の由来であり、その松が「阿古耶の松」と呼ばれるようになり、山頂にその碑が建っている。また、1356 年、山形開城の祖である斯波兼頼が山形城築城の際、城正面に当たる山（今日の千歳山）から城の配置を見定め、西面山麓に稻荷神社を再建し千歳万歳（せんざいまんざい）にかけて天下泰平、五穀豊穡を祈願したことから千歳山と呼ぶようになったとの話も残っている。

千歳山の代名詞ともなっている松だが、1982 年（昭和 57）頃からマツクイムシの被害が全山に出始め 6,000 余本が枯れたという。これらは山林内で 1 本ごとに切り倒し、1 m 余の長さに切断し積み重ね、ビニールシートで包み薬剤処理している様子が至る所で見ることが出来る。奥平清水口コースなどに枯れ木がまだまだ残っているが、地元有志がボランティアでアカ松の植樹も盛んに行われ、千歳山自然休養林としての保全維持に努められている。

千歳山の南に江戸時代後期から始まったとされる千歳山の土を使って焼く窯業集落で知られる平清水がある。車で千歳山山麓にある耕龍寺に向かうと、「行き止まり」の大きな文字の看板が目に入る。登山口の一つである奥平清水口に向かうには、行き止まりの禁を破って進むことになる。これは車道の行き止まりを意味するだけでなく、死後に魂が深山に向かう前に留まる集落の端の山の意味も込められている。

里人が亡くなると霊は、近くの端山（はやま）と呼ばれる美しい三角形の山に昇り、残された家族を見守る。その代表が千歳山だという。確かに千歳山の裾野には神社、寺院と共に小さな石仏が風景と溶け合っている。そして、33 年後にさらに高く深い深山（みやま）に昇って、あの世に行くと考えられている。

この「端山深山（はやまみやま）信仰」は千歳山界限に限らず県内各地で見られる。山形は千歳山と瀧山、上山では葉山と蔵王、鶴岡の金峯山と月山または摩耶山、羽黒の羽黒山と月山、米沢は羽山と吾妻山、村山は葉山と月山などである。

千歳山の登山口は最も人気のある岩五郎稲荷神社参拝路からの岩五郎口である。神社という集客力に加えて幾つもの赤い鳥居潜る魅力からだろうか。千歳山公園口からのコースは直ぐに岩五郎口と合流する。五郎宗吉（平清水）口、これらのコースがジグザグに登る平均した傾斜のコースに対して萬松寺口は階段状の急坂、続いて岩稜と直線的な登りが続く。平清水集落から 20 分ほど歩いてからの奥平清水口は最も長い。更に、コースとコースを繋ぐ連絡路、踏み跡などもある。コースを選択し、連絡路を利用すると変化に富んだコース取りが可能である。

千歳山に登る人の数には驚かされる。かなりの雨降りでも誰かと行き交うし、早朝から夕方まで途切れることがない人気ぶりである。しかも、山形限定ではなく他の市町村、遠くは県外からの方々とも会える山である。今日は二回目の声も聞かず、毎日登っているのかと何回か質問された。日本山岳会山形支部会員の奥方の目標が年間 200 回だという。

千歳山北、馬見ヶ崎川を挟んで盃山がある。ここもまた市民に親しみ深い山である。高校の時、学校から近かったこともあり山岳部のトレーニングの山であった。大雪の時にはスキーを持ち出し遊びまわっていた思い出の地でもある。60 余年ぶり山形に来て二冬過ぎたが、千歳山にスキーを持ち出す降雪にはまだ恵まれてはいない。

<2020/11>